The Asahi Shimbun GLOBE 第1日曜日発行 第3種郵便物認可 朝日新聞 February 2021 No.238

マスク時代のコミュニケーション

顔の見方に文化差、マスクは子の発達に懸念も

山口真美・中央大教授

顔の相当部分を隠すマスクはどんな心理学的な意味を持ち、子どもの発達にはどのような影響がありそうか。中央大教授（心理学）の山口真美に聞いた。

マスクへの抵抗感や慣れは文化によって違う。絵文字の表情・感情は、日本では目、欧米では口で表す。2018年の平昌冬季五輪で、チェコの女子選手がスキーで思いがけず優勝した時、ノーメイクをサングラスで隠して記者会見に臨んだ。コロナ以前から日本ではノーメイクにはマスク、欧米ではサングラスだ。

私たちは表情は普遍的なものと信じてきた。だが10年ほど前から、視線がどこに向いているかを追う装置でより繊細に科学的に調べられるようになった。すると、私たちは確かに世界々[illegible]の表情を読み取[illegible]元、欧[illegible]目部位も[illegible]うことがわ[illegible]

東アジ[illegible]は、目元[illegible]スをずっと[illegible]感じを抱くのは、表情・感情を一方的に隠していると感じるからだろう。

多くの欧米人がマスクに抵抗を感じるのは言葉が聞き取りにくくなる問題もあるが、やはり表情・感情が読み取れない気持ち悪さからだと思われる。親しい人との感情のやりとりというコミュニケーションの根幹ができないというのは苦痛で不愉快だろう。

こうした違いは生まれつきではない。

私たちが東アジア人（日本人）と欧米人（英国人）の赤ちゃんで注目部位を調べたところ、生後7カ月でも東アジア人は目元、欧米人は口元だった。欧米のお母さんが「ハイ、ベイビー」などと大げさに口を広げて話しかけるのに比べ、日本のお母さんはにこにことほほえむ[illegible]れぞれのお母さ[illegible]く見ている[illegible]る、自国[illegible]ことがわ[illegible]などこの[illegible]き、L[illegible]ぐらい[illegible]うした[illegible]

やまぐち・まさみ
中央大文学部教授。1歳未満の赤ちゃんの世界を見る能力の発達に関する研究を続ける。著書に「自分の顔が好きですか?」「こころと身体の心理学」など。

そもそも赤ちゃんは生まれつき、トップヘビーと呼ばれる両目と口の逆三角形に反応する。これを鋳型として顔を見る学習を重ね、文化差ができていく。

もし、ずっとマスクを着けて口を隠したままの人に囲まれて育つと、顔を見つけられなくなるかも知れない。保育園では、子ども同士はマスクをせずに接するのでお互いの顔を覚える。ところが、マスクをした保育士は誰が誰だか分からないので、マスクの色や描いたキャラクターで特徴付けている。ひょっとすると今の子どもたちは同年代の顔は覚えても、外集団の人の顔、つまり大人の顔を覚えにくくなるかも知れない。私たちが見慣れない黒人の顔を区別しにくいのと同じだ。

もともと鋳型に注目しにくい自閉症の子どもたちへの影響も気になる。普段見ていない顔から表情を読み取らなくてはいけなくなるからだ。言語獲得でも、健常な子どもは自閉症の子どもに比べて口元の動きに注目していた。口元がマスクで隠されると言語獲得にも支障が出るかも知れない。

今は昔と違いさまざまなメディアがある。子どもの注目は静止画より動画、動画よりリアルの方が高まるものだが、このままマスクをする時代が続くと、マスクをしたリアルの人よりマスクをしていない人が映るテレビ、さらにはインタラクティブに動くネット映像の方が魅力的に感じるようになるかも知れない。実験できそうだ。（聞き手・大牟田透）